

平成28年1月21日

事業経過報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

都道府県教育委員会等名 岐阜県教育委員会

所 在 地 岐阜県藪田南2-1-1

代表者職氏名 松川 禮子

平成27年度英語教育強化地域拠点事業における事業経過報告書を提出します。

1. 事業の実施期間

委託を受けた日 ～ 平成28年3月31日

2. 強化地域拠点の学校名

【岐阜地域】

ふりがな	ぎふけんりつながらこうとうがっこう	ふりがな	すずき けんじ
学校名	岐阜県立長良高等学校	校長名	鈴木 賢治
ふりがな	ぎふしりつながらちゅうがっこう	ふりがな	はら ひさし
学校名	岐阜市立長良中学校	校長名	原 尚
ふりがな	ぎふしりつながらにししょうがっこう	ふりがな	わだ みつる
学校名	岐阜市立長良西小学校	校長名	和田 満

【西濃地域】

ふりがな	ぎふけんりつおおがきにしこうとうがっこう	ふりがな	ますだ かずのり
学校名	岐阜県立大垣西高等学校	校長名	増田 和伯
ふりがな	おおがきしりつせいわちゅうがっこう	ふりがな	さわだ ふみひこ
学校名	大垣市立星和中学校	校長名	澤田 文彦
ふりがな	おおがきしりつなかがわしょうがっこう	ふりがな	きたむら あつし
学校名	大垣市立中川小学校	校長名	北村 厚史
ふりがな	おおがきしりつこのしょうがっこう	ふりがな	さとう あきひろ
学校名	大垣市立小野小学校	校長名	佐藤 明弘

3. 研究内容

(1) 研究開発課題

英語で伝え合うことの喜びを一層味わわせるとともに、伝える内容と使用する言語材料に深まりと多様性をもたせる系統的な英語教育の在り方
 ～明確な目標設定・教材の開発・英語使用機会の増加・fluency と accuracy の伸長を図る指導と評価を通じて～

(2) 研究の概要

小・中・高等学校を通じた系統的な英語指導により実現させたいことは、①生涯学習の観点から、英語で伝え合うことの喜びを存分に味わわせること、②表現内容に広がりと深まりをもたせていくこと、③②を可能とするために言語材料を多様にしていくことであると考えます。

そして、これら3点を実現していくために必要なことは、(ア) 小学校における児童の発達の段階を踏まえた特別の教育課程を編成・実施し、(イ) 児童生徒の実態と各学校種間のつながりを踏まえ目標を明確に設定すること、(ウ) 発信しうる・発信したくなる内容をもたせることに資する教材を開発すること、(エ) 授業における英語の使用機会を格段に増加させ、授業を実際のコミュニケーションの場面とすること、(オ) 活用を通して習得を図る指導により fluency と accuracy の両面を鍛え伸長することの5点であると考えます。

以上の考え方の妥当性を明らかにするために、研究校、市教育委員会、県教育委員会、運営指導委員会が一体となった計画的な実践研究を行う。

(3) 現状の分析と仮説等

①現状の分析と研究の目的

I 現状の分析及び本事業における取組

ア) 小学校

以下に、3種類の意識調査の結果を示す。

- ① 「英語の学習は好きですか」の設問に対して、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した児童を合わせた割合

全国 (a)	岐阜県 (a)	本県における強化地域 (b)
76 %	73 %	81 %

※ (a) の数値は、平成25年度全国学力・学習状況調査による。調査時期は4月。

※ (b) の数値は、強化地域の内岐阜地区の結果。市教育委員会による調査（以下、「独自調査」）による（対象児童数：1,232人）。調査時期は12月。

- ②上記「本県における強化地域」（以下、「強化地域」）の結果における、学年別の割合

第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
78 %	81 %	87 %	80 %

※当該市教委の独自調査は、第1、2学年の児童も対象に実施。

- ③強化地域において、「英語の学習をもっとしたいですか」の設問に対して、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した児童を合わせた割合

第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
95 %	94 %	90 %	93 %

※本設問は岐阜地域で実施

上記①～③の結果から、強化地域の児童の実態として次のことが挙げられる。

- ・英語学習に対して肯定的に捉えている児童の割合が、全国、県と比較して高い。
- ・学年が上がっても英語学習に対する意欲がそれほど低下しておらず、第6学年の児童も、その多くが英語学習を好きだと思っている。さらに、英語学習に対する今後の期待を、かなり多くの児童がもった状態で中学校へ進学している。

上記の現状等から考えられる成果は以下のとおりである。

○言語活動への取組の高い意欲

「Hi, friends!」等における活動を活用したり、行事や他教科での学習内容等を踏まえて児童の興味・関心に即した独自の活動を開発したりして、指導に当たっている。

○英語使用機会の増加

教員がクラスルームイングリッシュを多用したり、市教育委員会がALTや英語に堪能な指導補助者（以下、「ALT等」）の1校当たりの配置頻度を増やしたりしたことで、授業中に児童が英語に触れたり英語を使ったりする機会が大変増加した。

○英語に対する興味・関心の喚起

英語に触れたり英語を使用したりする機会において、ALT等の話す英語に憧れをもったり、英語の発音やイントネーションに興味をもったりする児童が多く、英語に対する興味・関心が喚起されている。

○お互いに認め合う学習集団の育成

コミュニケーションの態度や発話の内容について児童が互いに認め合う機会が必ず設けられており、望ましい学習集団が育成されている。

一方で、課題（本事業において取り組むこと）は以下のとおりである。

■言語への気付きの促進

児童は、英語学習を通して英語そのもの（発音や単語・文の仕組み）にも興味をもつ。英語に触れ英語を使用する機会を確保し、英語表現への慣れ親しみを図るとともに、言語への気付きを促す指導も大切にしなければならない。その際、英語を使用する（アウトプット）させることに主眼を置き過ぎることなく、英語に触れる（インプットの）量を十分に確保するなど、両者のバランスに配慮しなければならない。

■児童の発達の段階に応じた「考えながら話す」姿の具現

児童は、ある単元で英語表現に慣れ親しむと、当該単元以降の別の単元の活動でも、その表現を使って話そうとすることが少なくない。また、例えば、What food do you like?という表現に慣れ親しむと、場面に応じて「food」を「color」や「sport」にかえて表現してみようとするなど、既習表現を活用して話そうとする児童もいる。これは、上記「言語への気付き」が図られた結果生まれる姿である。対話を暗唱させて発表させる指導に終始せず、既習表現を駆使し、一語文、二語文であっても自分なりに考えながら話す姿の具現を目指した指導を行いたい。このことは、児童の学習意欲の喚起及び中学校英語科への円滑な接続に寄与するものと考えられる。

■学年の目標の設定

小学校卒業段階でどこまで指導すればよいかを明らかにしていないため、中学校への接続について「今の指導でいいのか」といった不安を感じている教員が少なくない。系統的な指導を実現させる上で各学年の目標の明確な設定は必須要件と考える。

■「読むこと」「書くこと」の指導の工夫

高学年の児童にみられる「読めるようになりたい」「書けるようになりたい」という欲求に応じる必要性を多くの教員が感じているものの、そのための具体的な手立てを見付けることができていない。

イ) 中学校

以下に、5種類の意識調査の結果を示す。

- ①英語の学習は好きですか」の設問に対して、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した生徒を合わせた割合

全国 (a)	岐阜県 (a)	本県における強化地域 (b)
53 %	50 %	55 %

※ (a) (b) の数値は、上記の小学校と同じ調査による。なお、対象生徒数は3,319人

- ②上記の強化地域における調査において、英語の学習が「楽しい」「どちらかといえば楽しい」と回答した生徒が、「楽しい理由」として回答した主な項目

英語を聞いたり話したりすると、英語の力が付くと思うから	35 %
英語を使う機会が増えたから	32 %
A L Tや先生が自分の言ったことを分かってくれたから	31 %

- ③生徒の英語力

	岐阜県	強化地域
英検3級以上を取得している生徒の割合 (a)	17 %	28 %
英検3級以上相当と思われる生徒の割合 (b)	16 %	28 %
(a) + (b)	33 %	49 %

※平成25年度英語教育実施状況調査の結果

- ④「CAN-DO」の形式により学習到達目標を設定している学校の割合

岐阜県	強化地域
15 %	100 %

※平成25年度英語教育実施状況調査の結果

- ⑤-1「話すこと」及び「書くこと」を評価するためのテストの実施校の割合

岐阜県	強化地域
91 %	100 %

※平成25年度英語教育実施状況調査の結果

- ⑤-2「スピーキングテスト」と「ライティングテスト」の1学年当たり年間実施回数

	岐阜県	強化地域
スピーキングテスト	3回	16回
ライティングテスト	3回	5回

※平成25年度英語教育実施状況調査の結果

(参考1) 授業における、生徒の言語活動時間の割合

	岐阜県	強化地域
授業中おおむね言語活動を行っている (75%~)	16 %	69 %
半分以上の時間、言語活動を行っている (50%~75%)	46 %	23 %
半分未満の時間、言語活動を行っている (25%~50%)	36 %	8 %
あまり言語活動を行っていない (~25%)	2 %	0 %

(参考2) 授業における、英語担当教員の英語の使用時間の割合

	岐阜県	強化地域
発話をおおむね英語で行っている (75%~)	13 %	8 %
発話の半分以上を英語で行っている (50%~75%)	50 %	92 %
発話の半分未満を英語で行っている (25%~50%)	37 %	0 %

※平成25年度英語教育実施状況調査の結果

上記①~④の結果から、強化地域の生徒の実態として次のことが挙げられる。

- ・英語学習に対して肯定的に捉えている生徒の割合が、全国、県と比較して高い。
- ・英語学習を楽しいと思う理由として、「英語に触れ、英語を使用する機会が多いこと」を挙げる生徒の割合が高い。
- ・英語に触れ、英語を使用する機会において、自分の伝えた内容を相手が理解してくれたことに喜びを感じている生徒の割合が高い。また、このような機会は、英語の力を付けるために必要（有効）なことだと考えている生徒の割合が高い。
- ・授業における生徒の言語活動時間の割合、教員の英語使用時間の割合がどちらも高い。

上記の現状等から考えられる成果は以下のとおりである。

○英語使用機会の増加

教員ができる限り授業を英語で行うことに努めたり、市教育委員会がALT等の1校当たりの配置頻度を増やしたりしたことで、授業中に生徒が英語に触れたり英語を使う機会が増加した。生徒は、このことを好意的かつ有益と捉えている。

○生徒が英語を使って表現する活動の重視

ペアワークやグループワークなどで生徒が言語活動に取り組む時間の割合が大変高い。また、当該活動に取り組んだ結果を評価するパフォーマンステストの実施回数も高い。これらのことにより言語活動に対する意欲や必然性を高めていると推察される。

○単元における意図的な指導の実施

明確な単元指導目標のもと、各単位時間の役割を明確にした指導ができています。そのため、単元終末の活動に十分取り組む生徒が多い。

一方で、課題（本事業において取り組むこと）は以下のとおりである。

■英語の使用機会の一層の確保

英語の授業が楽しいと思う理由として、「英語の使用機会が増えたこと」を挙げている生徒がいる。授業における言語活動の機会を一層充実させることで、生徒の学習意欲を更に高めることが期待できる。言語活動を授業の中核に据えることは、生徒の英語運用能力の向上を図る上で必須要件であることは言うまでもない。

■「伝え合う活動」と「理解・練習する活動」の確実かつ効果的な実施

表現内容とそのために必要な言語材料を同時に考えながら表現する活動（伝え合う活動）に十分取り組ませていないため、予め準備しておかないと十分なパフォーマンスができない場合がある。「考えながら表現する」ことを小中一貫して大切にしたい。また、表現における「正確さ」の定着が不十分である。伝え合う活動中にみられた文法的な誤りを取上げ指導するなどの活動（理解・練習する活動）が必要である。「活用を通して習得を図る」指導により英語運用能力の一層の伸長を図る必要がある。

■各学年の学習到達目標の設定

単元の指導目標は明確に設定されていることに比べ、各学年の学習到達目標は十分明確とはいえないため、長いスパンをかけた系統的な指導の実現には至っていない。

■伝えたいと思う内容をもたせることに資する題材・教材の開発

技能の指導は、伝えたい内容をもたせて初めて効果を発揮する。生徒が「伝えたい」という内容をもたせることができるよう、例えば実生活を想起させるオーセンティックな教材を活用するなど、題材や教材の開発が必要不可欠である。

■言語材料の柔軟な取扱いと教科書の使用方法の工夫・改善

小学校では、場面と伝える内容が先行し、英語表現は、「そのために必要なので慣れ親しめるようにする」という考え方で指導されている。この考え方を中学校にも取り入れ、言語材料については、教科書の配列にとらわれることなく柔軟に取り扱う。例えば、設定した場面において現在完了形の指導が必要であれば、第1学年の授業であっても積極的に導入する。その際、文法的な指導は行わずに使用させることに留め、当該文法事項が扱われている段階（第3学年）で、文構造を含めた説明を行い知識の定着を図る。つまり、言語材料を「整理する」ために教科書を使うという活用方法について、その在り方を工夫・改善する。

ウ) 高等学校

以下に、5種類の意識調査の結果を示す。

- ①英語の勉強は大切だと思いますか」の設問に対して、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と回答した生徒を合わせた割合

全国 (a)	本県における強化地域 (b)
83 %	96 %

※ (a) の数値は、平成19年度公立高等学校教育課程実施状況調査による。(対象：高校2年生)
 ※ (b) の数値は、強化地域(岐阜・西濃)の研究校の結果。県教育委員会の独自調査による(対象：高校2年生全員、生徒数：625人)。調査時期は9月。

- ②上記の強化地域における調査において、英語の勉強「大切だ」「どちらかといえば大切だ」と回答した生徒が、「大切だと思う理由」として回答した主な項目

どの仕事に就くにも英語は必須だから	56 %
海外の人たちとコミュニケーションをとれるようになりたいから	35 %
海外旅行に行きたいから	30 %

- ③生徒の英語力

	岐阜県	強化地域
英検準2級以上を取得している生徒の割合 (a)	8 %	7%
英検準2級以上相当と思われる生徒の割合 (b)	21 %	59%
(a) + (b)	29 %	66%

※平成25年度英語教育実施状況調査の結果

- ④「CAN-DO」の形式により学習到達目標を設定している学校の割合

岐阜県	強化地域
41 %	100%

※平成25年度英語教育実施状況調査の結果

- ⑤「話すこと」及び「書くこと」を評価するためのテストの実施校の割合

岐阜県	強化地域
77 %	100%

※平成25年度英語教育実施状況調査の結果(コミュニケーション英語Ⅰにおいて)

(参考1) 授業における、生徒の英語による言語活動時間の割合

<コミュニケーション英語Ⅰにおいて>	岐阜県	強化地域
授業中おおむね言語活動を行っている (75%~)	19 %	33%
半分以上の時間、言語活動を行っている (50%~75%)	41 %	67%
半分未満の時間、言語活動を行っている (25%~50%)	30 %	0%
あまり言語活動を行っていない (~25%)	11 %	0%

(参考2) 授業における、英語担当教員の英語の使用時間の割合

<コミュニケーション英語Ⅰにおいて>	岐阜県	強化地域
発話をおおむね英語で行っている (75%~)	23 %	100%
発話の半分以上を英語で行っている (50%~75%)	47 %	0%
発話の半分未満を英語で行っている (25%~50%)	30 %	0%

※平成25年度英語教育実施状況調査の結果

上記①~⑤の結果から、強化地域の生徒の実態として次のことが挙げられる。

- ・英語学習に対して肯定的に捉えている生徒の割合が、全国と比較して高い。
- ・英語学習が大切と思う理由として、「どの仕事に就くにも英語は必須だから」を挙げる生徒の割合が高い。

- ・新学習指導要領に則った第1学年の授業では、生徒の言語活動を中心とした展開を重視し、教員も英語を使用して授業が行われている。生徒は、スピーチやエッセイライティング等の活動を通して、自分の考えや意見を表現することに喜びを感じている生徒が多い。

上記の現状等から考えられる成果は以下のとおりである。

○文部科学省委託事業「英語によるコミュニケーション能力・論理的思考力を強化する指導改善の取組」拠点校としての取組

英語強化地域拠点の研究校となる2校の高等学校は、平成25年度、文部科学省委託事業の拠点校として、「4技能を総合的に育成する指導法の研究」をテーマに、生徒の言語活動が主体となる授業の工夫・改善に努め、研究成果の普及のため、地区別研修会を定期的実施している。

○「CAN-DO」形式による学習到達目標に基づいた「指導と評価の年間指導計画」の作成

生徒の実態を適切に把握した上で、生徒が言語を用いて何ができるようになることを目指すかという観点から、生徒に身に付けさせたい能力を明確化し、指導と評価の方法を外国語科担当教員間で共有している。

一方で、課題（本事業において主に取り組むこと）は以下のとおりである。

■グローバル社会で使われている本物（オーセンティック）教材の活用

英語で映画やビデオやニュースを見たり、英語で新聞・雑誌・書籍・ウェブサイトを読んだりする活動が不足している。オーセンティックな英語教材を授業に活用することで、英語の実社会での実用性を生徒に認識させることが必要である。

■パフォーマンステストを活用した適切な観点別評価の実施

論理的思考力、批判的判断力、情報収集能力を含めた総合的な英語活用能力が、各観点・領域において生徒に身に付いているかを把握するために、「CAN-DO」形式による学習到達目標に照らし合わせながら、パフォーマンステストを複数回にわたり実施する必要がある。

■グローバル社会で活躍することを意識した「自律的な学習者」の育成

短期・長期留学、留学生の受け入れや、テレビ会議システムを使った海外高校生とのディスカッションなど、生徒が実際にグローバルな環境を意識した場面で英語を使う場面を設け、学習の動機付けを行うとともに、校内でも、英語科主催で校内スピーチコンテスト、ディベート大会、ポスターセッションを開催することが必要である。

II 研究の目的

上記「I 現状の分析」を踏まえ、研究の目的を以下のとおりとする。

英語で伝え合うことの喜びを一層味わわせるとともに、伝える内容と使用する言語材料に深まりと多様性をもたせる系統的な英語教育の在り方を究明する。

②研究仮説

小学校の中学年で週1コマの「活動型」、高学年で週3コマ（初年度は週1コマ）の「教科型」の英語教育について、小学生の発達の段階を十分に踏まえた教育課程を編成・実施するとともに、とりわけ中・高等学校において、

- ・児童生徒の実態と各学校種間のつながりを踏まえ目標を明確に設定する
- ・発信しうる・発信したくなる内容をもたせることに資する教材を開発する
- ・授業を実際のコミュニケーションの場面とするために、授業は英語で行うことを基本として英語の使用機会を格段に増加させる
- ・活用を通して習得を図る指導により、**fluency** と **accuracy** の両面を鍛え伸長する

ことにより、児童生徒に英語で伝え合うことの喜びを存分に味わわせるとともに、表現内容に深まりと、言語材料に多様性をもたせ、児童生徒の英語運用能力を高めることができる。

③研究成果の評価方法

【主たる評価事項】

評価事項	評価方法	対象
児童の英語力	児童英検学校版（日本英語協会）	小学校第6学年の児童
生徒の英語力	英語能力判定テスト（日本英語協会）	中学校第3学年の生徒
生徒の英語力	TOEFL Junior	高等学校第2学年の生徒
話すことの能力	小中系統パフォーマンステスト	小学校第5学年以上の児童 中学校の全生徒
英語授業に対する意識	意識調査	小・中学校の全児童生徒

【補助的な評価事項】

評価事項	評価方法	対象
各学年の学習到達目標の設定状況	英語教育実施状況調査（文科省実施予定）	中学校（小学校第5、6学年については、県教委独自調査を実施予定）
授業における、生徒の英語による言語活動時間	英語教育実施状況調査（文科省実施予定）	中・高等学校（小学校第5、6学年については、県教委独自調査を実施予定）
授業における、英語担当教員の英語の使用状況	英語教育実施状況調査（文科省実施予定）	中・高等学校（小学校第5、6学年については、県教委独自調査を実施予定）
外国語表現の能力を評価するためのパフォーマンステストの実施状況	英語教育実施状況調査（文科省実施予定）	中・高等学校（小学校第5、6学年については、県教委独自調査を実施予定）

(4) 研究開発型

岐阜地域	開始学年及び週当たり授業時数コマ			
	第一年次	第二年次	第三年次	第四年次
①小学校 外国語活動型	第1学年 0.5コマ 第3学年 1 コマ	第1学年 1.5コマ 第3学年 2 コマ	第1学年 0.5コマ 第3学年 1 コマ	第1学年 0.5コマ 第3学年 1 コマ
②小学校 教科型	第5学年 2 コマ	第5学年 3 コマ	第5学年 3 コマ	第5学年 3 コマ

西濃地域	開始学年及び週当たり授業時数コマ			
	第一年次	第二年次	第三年次	第四年次
①小学校 外国語活動型	第3学年 1 コマ	第3学年 1コマ	第3学年 2コマ	第3学年 2コマ
②小学校 教科型	第5学年 2 コマ	第5学年 3コマ	第5学年 3コマ	第5学年 3コマ

(5) 研究計画 (◆：両地域共通、□：岐阜地域、○：西濃地域)

本事業における取組内容を以下にまとめる(詳細は、「3. (3) ① I 「現状の分析及び本事業における取組」参照)。

これらの取組を、次ページ以降に示す計画にしたがって実施する。

<本事業における主な取組内容>

【小学校】

- ◆言語への気付きの促進
- ◆児童の発達の段階に応じた「考えながら話す」姿の具現
- ◆学年の目標の設定
- ◆「読むこと」「書くこと」の指導の工夫

【中学校】

- ◆英語の使用機会の一層十分な確保
- ◆「伝え合う活動」と「理解・練習する活動」の確実かつ効果的な実施
- ◆各学年の学習到達目標の設定
- ◆伝えたいと思う内容をもたせることに資する題材・教材の開発

言語材料の柔軟な取扱いと教科書の使用方法的工夫・改善

【高等学校】

- ◆グローバル社会で使われている本物(オーセンティック)教材の活用
- ◆パフォーマンステストを活用した適切な観点別評価の実施
- ◆グローバル社会で活躍することを意識した「自律的な学習者」の育成

【教材に関すること】

(◆：両地域共通、□：岐阜地域、○：西濃地域)

	小学校	中学校	高等学校
第一年次	<p>[活動型]</p> <p>◆「Hi, friends!」と「Kids Crown」を基本教材としつつ、児童の学習意欲の喚起に資するよう、当該基本教材の使用法の工夫及び見直しと改善</p> <p>[教科型]</p> <p>◆上記基本教材の見直し及び「読むこと」「書くこと」の指導で使用する教材の開発。</p>	<p>◆教科書の各単元で取り上げられている題材との関係を踏まえ、当該単元における表現活動への意欲の喚起を目的とし、高度化された言語活動での使用も視野に入れた目的とした独自教材の開発を行う。</p> <p>◆小学校での使用教材の活用方法について検討。</p>	<p>◆教科書の各単元で取り上げられている題材との関係を踏まえ、インターネットや海外メディアを利用して、4技能を総合的に育成することを目的とした独自教材の開発。</p> <p>◆中学校での使用教材の活用方法について検討。</p>
第二年次	<p>[活動型]</p> <p>◆第一年次の取組の継続。</p> <p>[教科型]</p> <p>◆ふるさと教材(県教委作成教材)及び補助教材(文科省作成)(以下、「新教材」)の活用方法の検討。</p>	<p>◆第一年次の取組を引き続き行い、必要な教材を整備。</p> <p>◆小学校での使用教材の活用。</p>	<p>◆第一年次の取組を引き続き行い、必要な教材を整備。</p> <p>◆中学校での使用教材の活用。</p>
第三年次	<p>[活動型]</p> <p>◆第二年次の取組の継続。</p> <p>[教科型]</p> <p>◆新教材の効果的な活用方法の工夫。</p>	<p>◆第二年次の取組の継続と、教材の見直し及び改善。</p>	<p>◆第二年次の取組の継続と、教材の見直し及び改善。</p>
第四年次	<p>[活動型・教科型共通]</p> <p>◆第三年次の取組の継続と、教材の見直し及び改善。</p>	<p>◆第三年次の取組の継続と、教材の見直し及び改善。</p>	<p>◆第三年次の取組の継続と、教材の見直し及び改善。</p>

※進捗状況と課題は次頁

平成27年度の進捗状況・課題【教材に関すること】

(◆：両地域共通、□：岐阜地域、○：西濃地域)

【進捗状況】

- 小学校 □文部科学省作成のデジタル教材や岐阜市で使用しているデジタルテキスト等を積極的に導入し、授業（短時間学習を含む）において、視聴覚に訴えながら児童の学習意欲を効果的に喚起。
- 5・6年の「アルファベット単元」では、「Hi, friends! Plus」の教材（絵カード、学習プリント、フォニックス）を活用。
 - 文字を「書くこと」に取り組む時の4線を入れたプリントの作成と使用。
 - 授業時数の増加分に伴った、児童の興味・関心や発達段階を考慮した新単元づくり。
- 中学校 □言語活動の場面を設定する上で2つの柱としている「人物」と「場所」について、それぞれに関わる題材を、岐阜県教育委員会作成のふるさと教材等を活用して、小学校と共有。
- 学習意欲の喚起と表現内容をもたせるために、実物（世界遺産の画像やビデオ、絶滅危惧種の動物の画像など）を活用。
 - 小学校・高等学校との合同授業において、学習意欲の喚起のための共通の話題を設定。
- 高等学校 □学校独自教材「Nagara English」（中・高接続のための自主（読み物）教材）を活用し、中学校から高校へのスムーズな移行を促進。
- 教科書題材と関連させた authentic 教材を活用。
(例) マララさんスピーチ、国枝伸吾選手インタビュー、バルセロナ観光マップ
 - Penguin Readers シリーズを多読教材として活用。
 - 英字新聞を要約活動に活用。
 - スマートフォンの英語ニュースアプリを多読教材として活用。

【課題】

- 小学校 □児童の現在や将来における実際の生活場面に、より密接につながる教材及びその活用方法の工夫。
- 発達の段階や学習内容に即した、「読むこと」「書くこと」への慣れ親しみを図る教材の開発。
 - 授業時間数の増加に伴って、各単元における指導の充実及び各学年で扱う言語材料の系統性を見直し。
- 中学校 □教材自体の共有に留まらない、指導内容に相応した教材の開発や教材の効果的活用に関わる協議等も含んだ小学校との連携。
- 小中高における学習内容について指導者の相互理解と教材等の効果的な活用。
- 高等学校 ◆海外メディアを利用した独自教材の開発と蓄積。
- 身近なICTの有効的活用。（スマートフォンの英語アプリ、Microsoft オートコレクト機能など）

【指導目標・指導内容（言語活動）・指導計画に関すること】（◆：両地域共通、□：岐阜地域、○：西濃地域）			
	小学校	中学校	高等学校
第一年次	<p>[活動型]</p> <p>◆本事業における「活動型」の特徴を踏まえ、第3・4学年の目標・内容の明確化及び指導計画の作成。 ※目標については児童と共有する。</p> <p>[教科型]</p> <p>◆第5・6学年における4技能の学習到達目標の設定及び指導計画の作成。 ※4技能の目標については、「何を」「どのように」「どの程度」の3つの観点から設定。 ※目標については児童と共有する。</p> <p>□「モジュール授業」における指導計画の検討。 ○「モジュール授業」における指導計画の作成。</p>	<p>◆県教委作成の学習到達目標を参考としながら、各学年における学習到達目標を検討、設定。 ※「何を」「どのように」「どの程度」の3つの観点から目標を設定。 ※「話すこと」の目標については、準備して取り組む言語活動と、即興的に取り組む言語活動の二種類の活動における目標を設定。 ※目標については児童と共有する。</p> <p>◆言語材料の柔軟な取扱い及び教科書の扱い方の工夫を反映させた指導計画の立案。</p> <p>◆上記【教材に関すること】で記した「独自教材」など用いた、高度化された言語活動（ディベート、多読、シャドーイングなど）の検討及び試行。</p>	<p>◆県教委作成の中学校学習到達目標を参考としながら、各研究校で設定している学習到達目標の見直し。 ※中高の円滑な指導の継続性の観点から、中学校卒業時に身に付けさせたい各領域の能力を分析し、目標を再設定。</p> <p>◆中学校で設定する即興的に取り組む「話すこと」の言語活動を、論理的思考力や批判的判断力を用いて一層深めた言語活動（パラメントディベート、ポスターセッション、即興スピーチ）の検討及び試行。</p>
第二年次	<p>[活動型]</p> <p>◆第一年次で設定・作成した目標・内容及び指導計画の見直しと改善。</p> <p>[教科型]</p> <p>◆児童の実態及び中学校の学習到達目標を踏まえ、目標及び指導内容の見直しと改善。 □週2時間の授業との関連を明らかにした「モジュール授業」の指導計画の作成と試行。 ○「モジュール授業」の指導計画の見直しと改善。 ○「新教材」を踏まえた指導計画の作成</p>	<p>◆生徒の実態と、小学校及び高等学校の学習到達目標を踏まえ、指導目標の見直しと改善。 ◆言語材料の柔軟な取扱い及び教科書の扱い方の工夫を反映させた指導計画の完成。 ◆第一年次の実践を踏まえた、指導内容の見直しと改善。 □小学校とともに、指導内容の系統表を作成。</p>	<p>◆生徒の実態と、連携中学校の学習到達目標を踏まえ、指導目標の見直しと改善。 ◆第一年次の実践を踏まえた、指導内容の見直しと改善。 □連携中学校とともに、指導内容の系統表を作成。</p>
第三年次	<p>[活動型・教科型共通]</p> <p>◆第二年次の取組の継続、及び目標、内容、指導計画の見直しと改善。</p>	<p>◆第二年次の取組の継続、及び目標、内容、指導計画の見直しと改善。</p>	<p>◆第二年次の取組の継続、及び目標、内容、指導計画の見直しと改善。</p>
第四年次	<p>[活動型・教科型共通]</p> <p>◆第三年次の取組を継続。</p>	<p>◆第二年次の取組の継続。</p>	<p>◆第三年次の取組の継続。</p>

※進捗状況と課題は次頁

平成27年度の進捗状況・課題【指導目標・指導内容（言語活動）・指導計画に関すること】

（◆：両地域共通、□：岐阜地域、○：西濃地域）

【進捗状況】

- 小学校 ◆小学校6年間の学習の系統性と発展性及び中学校での指導事項を踏まえた、各学年における4技能別の学習到達目標を設定。また、当該目標と連動させた各単元における「付きたい力」を明確化。
- 年間の学習到達目標を基に、学期ごとの到達目標並びに学習内容（題材、言語材料）の一覧を作成。
- 既習表現の反復活用を意図し、「言語材料」と「話題」に系統性をもたせた年間指導計画を作成。
- 「言語の使用場面」と「言語の働き」で小・中をつなぐ年間指導計画を立案。
- 第1、2学年から慣れ親しんできた語彙（動物や食べ物など）を、短時間学習における「読むこと」「書くこと」の指導内容として設定。
- 第3学年～第6学年において、「アルファベット単元」を設定。
- 短時間学習においては、曜日ごとに活動内容を3種類で設定し、年間指導計画を作成。3種類の活動とは、①授業で学んだ表現の定着を図る活動、②「Hi, friends!」を活用して行う活動、③ビデオ教材を活用して身近な英語表現に慣れ親しむ活動。
- 4技能ごとの各学年の目標を意識した指導計画、指導案の作成。
- 中学校 □「人物」「場所」を題材とした指導における「言語活動の内容」と「活用が見込まれる言語材料」を記した小・中9年間の題材系統図を作成。
- 「言語の使用場面」と「言語の働き」で小・中をつなぐ年間指導計画を作成。
- 高等学校 ◆生徒対象意識調査の結果を踏まえて、学習到達目標を見直し。
- ◆論理的思考力や批判的判断力の育成を目指した言語活動（プレゼンテーション、レシテーション、スピーチ、エッセイライティングなど）の、年間指導計画への位置付け。
- 教科書の各単元について、ねらいの明確化とそれに応じた学習指導計画の作成。
- 小学校・中学校の学習到達目標と、自校の学習到達目標のすり合わせ。
- 即興性の伸長を目指した言語活動（リテリング、質疑応答など）の継続。

【課題】

- 小学校 ◆授業実践や中・高との研究協議を通じて、学習到達目標の「内容」「方法」「程度」の具体を精査。
- ◆「書くこと」で取り上げる内容（英単語や英文）の決め出し。
- 音と文字、インプットとアウトプットについて、それぞれ扱うバランスや指導方法を見直した指導計画の作成。
- 第5、6学年の、年間70時間分の新たな単元の開発。
- 学年の系統性を踏まえた、各学年の単元指導計画の見直し。
- 中学校 □パフォーマンステストの結果等を基に、学習到達目標を「内容」「程度」を中心に小学校、高等学校と協議の上、修正。
- 高等学校 □3年間を見通した、英語カリキュラムデザインの構築。
- 各授業における学習内容と学習到達目標の明示方法。

【指導と評価に関すること（一部内容（言語活動）を含む）】（◆：両地域共通、□：岐阜地域、○：西濃地域）

	小学校	中学校	高等学校
第一年次	<p>[活動型・教科型共通]</p> <p>◆英語に触れ英語を使う時間を十分確保することで、英語表現への慣れ親しみや、言語への気付きを図るとともに、児童が既習表現を活用して自分の考えや気持ちが伝えられる活動や指導を工夫する。</p> <p>◆授業を実際のコミュニケーションの場面とともに、中学校で行われる「英語で行われる授業」に慣れ親しむことができるよう、指導者はクラスルームイングリッシュを活用した指導を実施。</p> <p>◆ALTや外部人材の効果的な活用方法を検討。</p> <p>□小中兼務ALTの効果的な活用方法を検討。</p> <p>[活動型]</p> <p>◆既存の評価に関する計画の見直しと改善。</p> <p>[教科型]</p> <p>◆「読むこと」「書くこと」の指導方法を、中学校での実践も一部参考にしながら検討する。</p> <p>※音声を中心とした活動を通して文字や文字の組合せへの認識を高め、聞いたり話したりして慣れ親しんだ英語を読んだり書いたりするなど、「聞くこと」「話すこと」の活動と結び付けながら指導する。</p> <p>◆4技能のよりよい評価方法について、中学校での実践も参考にしながら検討する。</p>	<p>◆「実際に言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う活動」（以下、「伝え合う活動」と、「言語材料について、理解したり練習したりする活動」（以下、「理解・練習する活動」）を、以下の2点に留意して実施。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・伝え合う活動では、適切な表現を生徒が自ら考えて取り組めるようにする。 ・「活用を通して習得を図る」考え方に立脚し、伝え合う活動と理解・練習する活動の組合せを工夫して指導過程を仕組む。 <p>(組合せの例)</p> <p>①必要最低限の言語材料について理解・練習する活動→②伝え合う活動→③②でみられたエラーを取り上げて行う理解・練習する活動→④再度、別の話題について伝え合う活動→⑤表現した内容を書き表し、文法上の正確さを再確認</p> <p>◆授業は英語で行うことを基本として、授業を実際のコミュニケーションの場面とする(小学校におけるクラスルームイングリッシュの活用を含む)。</p> <p>□小中兼務ALTの効果的な活用方法を検討。</p>	<p>◆生徒が情報や考えなどを理解したり伝えたりすることを実践するように具体的な言語の使用場面を設定して、中学校での指導方法を踏まえ、4技能を統合して行う言語活動を英語で行う。</p> <p>◆生徒が事実や意見などを多様な観点から考察し、論理の展開や表現の方法を工夫しながら伝えるような能力を養う言語の使用場面を設定して、中学校での指導方法を踏まえ、4技能を総合的にバランスよく指導する。</p> <p>◆授業は英語で行うことを基本として、授業を実際のコミュニケーションの場面とする(中学校におけるクラスルームイングリッシュの活用を含む)。</p>
第二年次	<p>[活動型・教科型共通]</p> <p>◆第一年次の取組を継続し、指導と評価の一層の充実を図る。</p> <p>◆英語による授業実践に心がけ、授業を実際のコミュニケーションの場面とする。</p>	<p>◆第一年次の取組を継続し、効果的な指導の在り方を究明。</p>	<p>◆第一年次の取組を継続し、効果的な指導の在り方を究明。</p>
第三・四年次	<p>[活動型・教科型共通]</p> <p>◆前年次の取組を継続し、効果的な指導と評価の在り方を究明。</p>	<p>◆前年次の取組を継続し、効果的な指導と評価の在り方を究明。</p>	<p>◆前年次の取組を継続し、効果的な指導の在り方を究明。</p>

※進捗状況と課題は次頁

平成27年度の進捗状況・課題【指導と評価に関すること（一部内容（言語活動）を含む）】

（◆：両地域共通、□：岐阜地域、○：西濃地域）

【進捗状況】

- 小学校 □低学年のインプット重視の指導において、TPR（全身反応教授法）や話の読み聞かせ等により、アウトプットのための土台を醸成。
- 中学年において、低学年で慣れ親しんだ音と意味に自然な形で繰り返し触れられるよう言語活動を改善。
- 高学年において、低・中学年で慣れ親しんだ表現を読んだり書いたりする初歩的な言語活動を仕組むことにより、文字や文構造への気付きを促進。
- 英語表現の音声、使用場面、機能について児童が気付くことができるよう、その提示方法や提示後の投げかけの言葉を工夫。
- 「読むこと」「書くこと」の指導においては、自己の学びを実感できるよう、授業終末に、写真や絵に相当する英単語を選択させる活動を設定。
- 「考えながら話す」姿を具現するために、モデルスキットの示し方を工夫（完成形のやり取りを示さない）。また、チャンツなどの指導においては、授業の課題を達成するために必要な最低限の英語表現だけを指導。
- 小・中合同授業を実施し、指導方法等の学び合い。（中学校も同様）
- 中学校 □各単位時間で身に付ける力を考慮しながら、実際のコミュニケーション場面で起こり得る問題解決的な要素を言語活動に位置付けることにより、「活用を通して習得を図る指導」を単元の中でスパイラルに実施。
- 中・高合同授業を、1週間にわたり毎日実施。
- 高等学校 ◆input（「読む」「書く」）→intake（音読＋リテリング）→output（単元終末の活動）の過程による授業を実施し、4技能を総合的に育成するための指導方法を研究。その際、学年が進むにつれて使用されている語彙が難しくなるため、outputの活動では既習教材を再度取り扱うなど教材のリサイクル化を実施。
- 英語各科目間の連携を図る表現活動の実施。
- 中・高合同授業を、1週間にわたり1日1時間のペースで実施。

【課題】

- 小学校 □低学年におけるインプット重視の活動において、児童の学習意欲が持続し、音声を中心とした言語に関わる気付きが促進される指導の工夫。
- 既習表現の活用が効果的に行われる言語活動及び指導法の追究。
- 中学校 ◆「理解・練習する活動」→「伝え合う活動」という固定化された指導過程を改善。
- ◆「伝え合う活動」における正確さの指導の在り方。
- 生徒が表現内容を広げ、深めることの意義やそれができた時の充実感を味わい、積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢が生み出されるような言語活動及び指導法の工夫。
- 高等学校 ◆学習到達目標と観点別評価との関連性を図った指導の在り方。
- OUTPUT活動のための語彙指導の充実。
- 伝え合う活動において、まとまった文で伝えたり、別の表現に言い換えて表現したりする能力の育成。

(6) 評価計画

第一年次～第四年次、校種別			
	小学校	中学校	高等学校
第一 年 次	<p>【英語力の評価①】 評価方法：児童英検学校版 （日本英語協会） 評価時期：1 1月 対象学年：第 6 学年</p> <p>【英語力の評価②】※1 評価方法：小中共通パフォー マンステスト 評価時期：各学期（予定） 対象学年：第 5、6 学年</p> <p>【英語力の評価③】※2 評価方法：パフォーマンステ スト等 評価時期：学年末 対象学年：第 5、6 学年</p> <p>【意識調査】 評価方法：アンケート調査 評価時期：1 2月末 対象学年：第 3 学年以上 （教員・保護者を含む）</p>	<p>【英語力の評価①】 評価方法：英語能力判定テスト （日本英語協会） 評価時期：1 1月 対象学年：第 3 学年</p> <p>【英語力の評価②】※1 評価方法：小中共通パフォー マンステスト 評価時期：各学期（予定） 対象学年：全学年</p> <p>【英語力の評価③】※2 評価方法：パフォーマンステ スト等 評価時期：学年末 対象学年：全学年</p> <p>【意識調査】 評価方法：アンケート調査 評価時期：1 2月末 対象学年：全学年 （教員・保護者を含む）</p>	<p>【英語力の評価①】 評価方法：TOEFL Junior 評価時期：8 月 対象学年：第 2 学年</p> <p>【英語力の評価②】※2 評価方法：パフォーマンステ スト等 評価時期：各学期（予定） 対象学年：1、2 学年</p> <p>【意識調査】 評価方法：アンケート調査 評価時期：8 月 対象学年：第 2 学年</p> <p>評価時期：2 月 対象学年：1、2 学年</p>
第二 年 次	(第一年次と同様)	(第一年次と同様)	(第一年次と同様)
第三 年 次	(第一年次と同様)	(第一年次と同様)	(第一年次と同様)
第四 年 次	(第一年次と同様)	(第一年次と同様)	(第一年次と同様)

※1：「小中共通パフォーマンステスト」【英語力の評価②】について
研究開発課題である「伝える内容と使用する言語材料に深まりと多様性をもたせる」ことができたかを測るために実施する。小学生及び中学生に、類似の言語活動（例えば、「尊敬する（好きな）人物を紹介する」という言語活動）に取り組みせ、その際、児童生徒が紹介した「内容」と使用した「言語材料」を比較・検証する。

※2：「パフォーマンステスト等」【英語力の評価③】について
学習到達目標の達成状況を測るために実施する。当該目標の達成状況を測るのに最も適していると思われる任意の単元の単元末において、同目標に対応した学習活動の特質等に応じて、筆記テスト、面接、エッセイ、スピーチ、活動の観察など、様々な評価方法の中から、その場面における児童生徒の学習状況を的確に評価できる方法を選択して実施する。
上記 4 種類（高等学校は 3 種類）の結果を経年比較するとともに、その変化の要因を以下の 3 点から分析することで、本研究の仮説の成否を検証する。

- ・各研究校で設定・作成された各学年の目標及び指導計画
- ・各研究校で開発された教材
- ・授業における、児童生徒の言語活動の時間の割合及び英語担当者の英語の使用時間の割合

※進捗状況と課題は次頁

平成27年度の進捗状況・課題（評価計画）

（◆：両地域共通、□：岐阜地域、○：西濃地域）

【進捗状況】

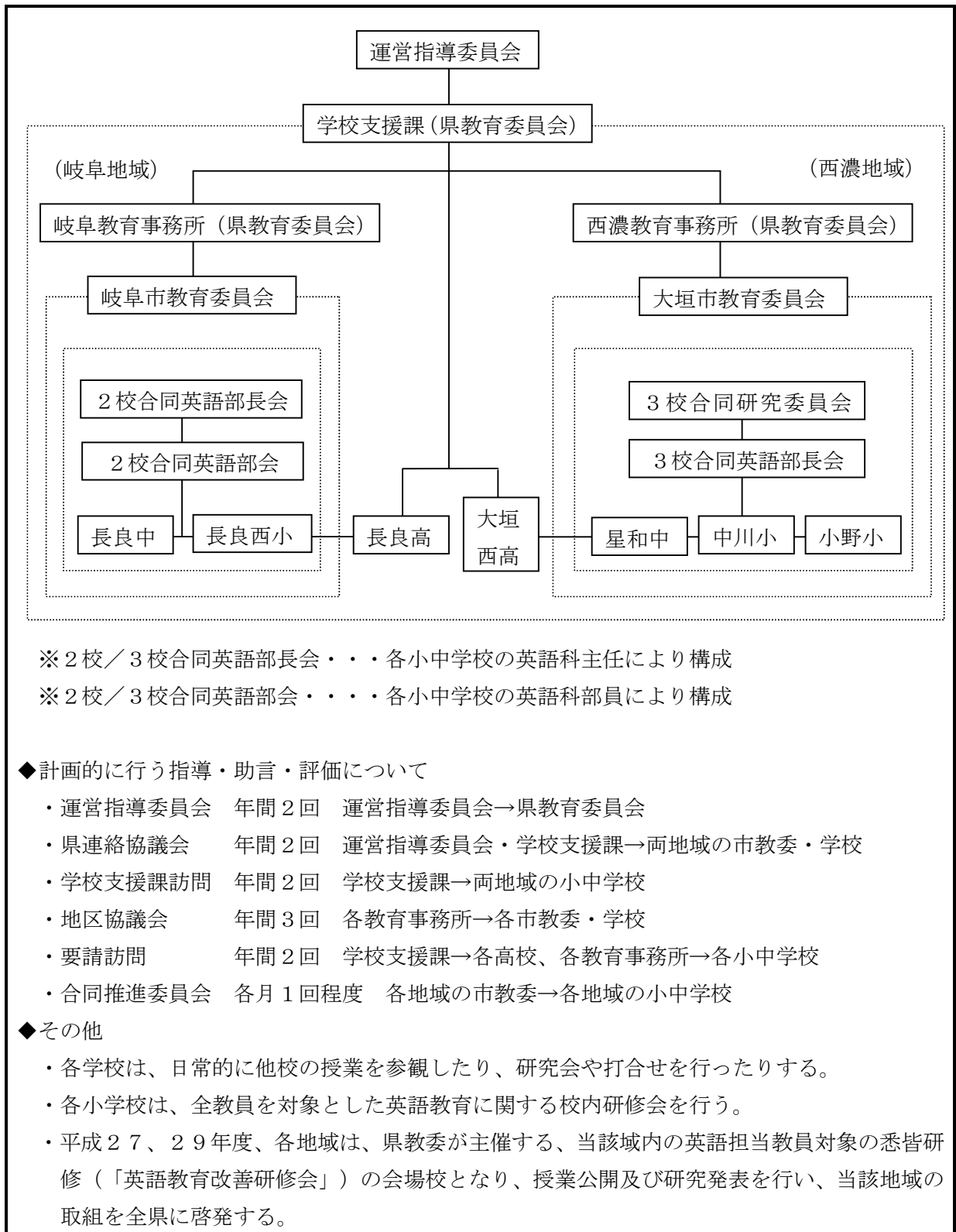
- 小学校 □ 1月に、全学年の児童を対象として意識調査を実施。
 □ 低中学年では各学期末に、高学年では各単元末にパフォーマンステストを実施。
 ○ 第6学年の児童を対象として児童英検（Bronze）を実施。
 ・ 平均正答率 93%
 ○ 第3学年以上において、学期に1回パフォーマンステストを実施。
 ○ 表現内容の広がりや深まり及び言語材料の多様化を測るための、小・中・高共通パフォーマンステストの実施。
- 中学校 □ 全学年、単元終末に行うスピーチ、プレゼンテーション、スキット等をパフォーマンステストとして実施。
 □ 第3学年の生徒を対象として英語能力判定テスト（英検）を実施。
 ・ 3級 48.7%（語彙等：86.6%、文章構成：64.9%、読解：73.0%、リスニング：77.1%）
 □ 1月に全学年の生徒を対象として意識調査を実施。
 ○ 第3学年の生徒を対象として英語能力判定テスト（英検）を実施。
 ・ 3級＋3級相当 69%（語彙とリスニング：どちらも80%超）
 ○ スピーキングテストを各学年年間4～5回実施。
 ○ 表現内容の広がりや深まり及び言語材料の多様化を測るための、小・中・高共通パフォーマンステストの実施。
- 高等学校 ◆ 全学年生徒（希望者）を対象に TOEFL Junior Comprehensive を実施。
 □ 4技能を統合的に図れる、T型パフォーマンステストを系統的に実施。
 □ 第2学年の生徒を対象に TOEFL Junior を実施。
 ・ 平均スコア 654（H25） → 652（H26） → 656（H27）
 ・ BLUE 40.3%（H25） → 37.9%（H26） → 38.5%（H27）
 ・ BRONZE 58.2%（H25） → 61.9%（H26） → 60%（H27）
 ・ SILVER 1.5%（H25） → 0.2%（H26） → 1.5%（H27）
 □ 10月に、全学年の生徒を対象に意識調査を実施。
 ○ 全学年、全科目においてパフォーマンステストを実施。
 ○ 第2学年の生徒を対象に TOEFL Junior を実施。（結果は現在集計中）
 ○ 小中高連携のパフォーマンステストの実施。

【課題】

- 小学校 ◆ 表現内容の広がりや深まり及び言語材料の多様化を測るための、小・中共通パフォーマンステストの実施方法の在り方。
 □ 各単位時間における具体的な評価方法に関わる校内研修の実施。
 □ 教師と児童が、各学期、各単元における到達目標を共有することを意図した「パフォーマンステスト実施計画」を作成。
 ○ 毎時間の授業における評価方法と評価結果の累積方法の在り方。
- 中学校 ◆ 表現内容の広がりや深まり及び言語材料の多様化を測るための、小・中共通パフォーマンステストの実施方法の在り方。
 □ 小中共通パフォーマンステストの実施時期、回数、方法の精査、及びその結果の確実な指導へのフィードバック。
- 高等学校 ○ 連携中学校との協力を図ったパフォーマンステストの実施及び評価の在り方。
 □ 連携小中学校とのパフォーマンステストにおけるルーブリックの在り方。

4. 研究組織

(1) 研究組織の概要



(2) 運営指導委員会

①活動計画

1 外部有識者（大学教授 2名）

- ・年間2回（4月及び2月）の運営指導委員会において、県教育委員会の事業推進に対して、指導・助言・評価を行う。
- ・年間2回（4月及び2月）の県連絡協議会において、市教育委員会及び研究校に対して、指導・助言を行う。
- ・年間3回（開催時期未定）の各地区協議会において、研究校に対して、指導・助言を行う。

2 教育委員会関係者（課長、指導主事 6名）

- ・運営指導委員会において、各研究校の取組の情報交換及び指導方法の改善を検討する。
- ・運営指導委員会における指導を踏まえ、本事業に関する総合的な評価を行い、今後取り組むべき方向性を提示する。

平成27年度の進捗状況（予定を含む）

■文部科学省実地調査

12月8日（会場校：大垣市立小野小学校、中川小学校、星和中学校）

■県連絡協議会 ※参加者：運営指導委員、各校代表者

第1回 4月23日（会場：県総合教育センター）

第2回 2月15日（会場：県総合教育センター）

■地区連絡協議会 ※参加者：運営指導委員長、大学教授（高等学校担当スーパーバイザー）、
県教育委員会指導主事、会場校の教員、会場校以外の当該地区の
小中高等学校の拠点校の教員

(岐阜地区)

第1回 6月19日（会場校：長良高校）

第2回 7月15日（会場校：長良西小学校・長良中学校）

第3回 12月 2日（会場校：長良西小学校・長良中学校）

(西濃地区)

第1回 6月25日（会場校：小野小学校）

第2回 11月12日（会場校：大垣西高校）

第3回 11月26日（会場校：中川小・小野小・星和中学校）

5. 年間事業計画（◆：両地域共通、□：岐阜地域、○西濃地域）

	小学校・中学校	高等学校	運営指導委員会
4月	□県連絡協議会 □3校合同英語部長会 □2校合同教科部会 ○研究推進委員会	・外部有識者による指導・助言 ・校内研究推進委員会、英語科研究会 ・授業研究会	第1回運営指導委員会（4/23）
5月	□2校合同英語部会 ○地区連絡協議会 ○研究推進委員会	・外部有識者による指導・助言 ・校内研究推進委員会、英語科研究会 ・授業研究会 ・県教委指導主事による学校支援訪問	
6月	□2校合同英語部会 ○研究推進委員会 ○意識調査の実施 ○文部科学省審議官来校（中川小）	・研究校地区別研修会① ・外部有識者による指導・助言 ・校内研究推進委員会、英語科研究会 ・授業研究会 ・岐阜県高校生春季英語キャンプ	
7月	□2校合同英語部会 □地区連絡協議会 ・学校支援課訪問 ○3校合同研究推進委員会	・GTEC（3年生） ・TOEFL Junior 説明会 ・外部有識者による指導・助言 ・校内研究推進委員会、授業研究会 ・地区連絡協議会①	
8月	□2校合同英語部会 □教材教具の改善及び環境整備 ○研究推進委員会	・岐阜県英語ディベート講習会 ・外部有識者による指導・助言 ・校内研究推進委員会、英語科研究会 ・授業研究会 ・中間報告発表会	
9月	□2校合同英語部会 ○研究推進委員会	・外部有識者による指導・助言 ・校内研究推進委員会、英語科研究会 ・授業研究会	
10月	□2校合同英語部長会 ○地区連絡協議会 ○研究推進委員会 ○四万十川市小中学校教員視察受け入れ	・外部有識者による指導・助言 ・校内スピーチコンテスト ・校内レンテーション大会 ・校内研究推進委員会 ・岐阜県高校生英語スピーチ大会 ・TOEFL Junior 実施（2年生）	
11月	□2校合同英語部会 ○地区協議会（兼 中川小公表会） ○研究先進校の視察 ○研究推進委員会	・岐阜県高校生秋季英語キャンプ ・外部有識者による指導・助言 ・校内研究推進委員会、英語科研究会 ・授業研究会 ・研究校地区別研修会② ・岐阜県高校生英語ディベート大会	
12月	□2校合同英語部会 □地区英語教育改善研修会 ・地区連絡協議会 ・学校支援課訪問 □英語能力判定テストの実施 ○研究推進委員会	・外部有識者による指導・助言 ・校内研究推進委員会、英語科研究会 ・授業研究会 ・地区連絡協議会② ・TOEFL Jr Comprehensive 実施 ・岐阜県高校英語教育フォーラム	
1月	□意識調査の実施 □2校合同英語部会 □「岐阜市の学校教育」公表会 □全国連絡協議会 ○研究推進委員会	・外部有識者による指導・助言 ・校内研究推進委員会、英語科研究会 ・授業研究会	
2月	□県連絡協議会 □2校合同英語部会 ○研究推進委員会 ○全国小学校英語研究大会参加	・外部有識者による指導・助言 ・校内研究推進委員会、英語科研究会 ・授業研究会 ・研究校地区別研修会③	第2回運営指導委員会（2/15予定）
3月	□2校合同教科部会 □3校合同英語部長会 ○研究推進委員会	・外部有識者による指導・助言 ・校内研究推進委員会、英語科研究会 ・授業研究会	